



# 日本のあゆみ

小林 泉

一般社団法人太平洋協会 理事長

中野悦子

公益財団法人オイスカ 理事長



## What's OISCA

オイスカ・インターナショナルは、「すべての人々がさまざまな違いを乗り越えて共存し、地球上のあらゆる生命の基盤を守り育てようとする世界」を目指して1961年に創立された国際協力NGOです。現在、41の国と地域にネットワークを持ち活動しています。

公益財団法人オイスカは、1969年にオイスカ・インターナショナルの基本理念を具体的な活動によって推進する機関として生まれ、主にアジア・太平洋地域で農村開発や環境保全活動を展開。特に人材育成に力を入れ、オイスカの研修を修了した現地の青年は、各地で地域開発に取り組んでいます。国内では、農林業体験やセミナー開催などを通して啓発活動を積極的に進めています。



### OISCAという名称の意味

- O rganization 機構
- I ndustrial 産業
- S piritual 精神
- C ultural 文化
- A dvancement 促進

人間の生存に不可欠な“産業・精神・文化”のバランスを大事にした発展を世界規模で推進していくことを目的として、このように名付けられました。



新春対談  
特集

# 太平洋の島国と ～未来をつくる交流の歴史～

太平洋の島国は、日本との深い結びつきがあるにもかかわらず、共に歩んできた歴史は、その裏にある人々のつながりが生んだ思いとともに、あまり知られていません。近年、国際社会においてもさらに存在感を増している太平洋島嶼国と、同じ海を囲む仲間として、どのように信頼関係を深め、相互の発展につなげていけるのか。

民間の私たちがどんな役割を果たしていくことができるのか。

一般社団法人太平洋協会の小林理事長と共に、歴史的経緯や出来事を振り返りながら考えます。





## 太平洋の島国

### 〈ミクロネシア〉

ミクロネシア連邦／マーシャル諸島／パラオ共和国／キリバス共和国  
ナウル共和国／グアム／サイパン

### 〈メラネシア〉

バブアニューギニア／フィジー共和国／ソロモン諸島／バヌアツ共和国

### 〈ポリネシア〉

サモア／トンガ／ツバル／クック諸島／ニウエ

# 明治時代から馴染みの南の島

**中野** 本日はお忙しい中あり

がとうございます。小林さんには財団の参与として関わっていたのですが、こうしてゆっくりとお話する機会が初めてなので楽しみにしております。小林さんが理事長を務めていらっしゃる一般社団法人太平洋協会発行の会報誌「パシフィッククウエイ」の2024年8月号で、その前月に開催された第10回太平洋・島サミット（PALM/以下、島サミット）の詳細を拝見しました。私たちオイスカは「アジア太平洋地域」を主な活動地域としていますが、普段は「アジア地域」の方に目が行きがちで、「太平洋地域」についてよく知らないことも多いように感じています。今日は太平洋地域と日本のつながりや小林さん自身のご経験など、いろいろお聞かせいただければと思います。よろしくお願ひします。

**小林** 今日はよろしくお願ひします。オイスカとは、顧問をしていた中野利弘さんとの

出会いから考えると、かなり古いお付き合いになります。

ところで日本では、太平洋島嶼地域に関して、今でも馴染みが薄く感じることが多い

ですが、日本と太平洋諸国は明治時代から深い関わりがありました。明治維新直後の日本は、欧米列強と肩を並べて

国際社会で生き残るために、国内の生産量、産業力をはるかに超える人口問題の解決策として、南洋への移民を計画

したのです。1868（明治元年）年には150余名の日本人がハワイに渡り、85年には

ハワイ王朝との直接交渉で移民協約が交わされ、以降ハワイが米国に併合された後の1

924年までに、20万人以上が移民しています。そこから、

いわゆる有名な「南進論」につながるわけですが、その間にグアムやニューカレドニア、

フィジーにも日本人移民の記録が残っています。今、移民

と言えば、ブラジルなどの南米をイメージする人が多いかもしれませんが、それはずっ

と後の話。最初は、日本と海続きの太平洋の島々に出かけていきました。だから、日本人にとって南の島々はとても馴染み深かったのです。

**中野** 私も移民といえば、ブラジルなどの南米のイメージが強くありました。

**小林** その後1914年に第一次世界大戦が勃発すると、日英同盟を結んでいた日本は

ドイツに宣戦布告。ドイツ領ミクロネシアを占領します。

その地が国際連盟の委任統治領として認められると、たくさん

さんの移民を送り込むわけです。日本はミクロネシアで開発に成功し、日本人と地元女性

性が結婚して多くの子孫を残した。でも戦後に生きる日本人の多くは、こんな交流の歴史

や過去を知りません。なぜかという、不幸にしてその後、太平洋戦争が起こったか

らだと思えます。この戦争で太平洋島嶼地域に送られた将兵は約60万人。その内、生き残って帰還したのはたった10万人。その方々は加害者であ



小林 泉 (こばやし いずみ)

一般社団法人太平洋協会 理事長

1948年、東京都に生まれる。71年に東京農業大学農学部畜産学科を卒業後、シンガポール南洋大学中国語科へ留学。74年に社団法人日本ミクロネシア協会（現一般社団法人太平洋協会）研究員、現在は同理事長。83年以降、群馬大学教養部（国際関係論）、東京大学教養学部（オセアニアの政治と社会）の非常勤講師など国内外での大学勤務を経て、98年より大阪学院大学教授（国際関係論、国際開発学、オセアニア地域研究）。2012年より太平洋諸島学会会長。著書は、『ミクロネシアの小さな国々』、『南の島の日本人』等多数。



一般社団法人 太平洋協会

1979年に、外務省北米局北米第一課所管の社団法人ミクロネシア協会として発足。財団法人アジア会館（会長 岩田喜雄）を母体とし、かつて日本の委任統治領だったミクロネシア地域と日本の友好発展を目的に、経済、文化、人的な交流事業を通じた親善を推進するとともに、調査研究や地域情報提供などの活動を実施。99年に社団法人太平洋諸島地域研究所に改称、2013年に現在の一般社団法人太平洋協会へと改称・改組。太平洋島サミットを国家レベルの話し合いの場にとどめず、開催地市民も巻き込んだ広範な文化交流の機会として提案・実施するなど幅広いネットワークと経験・蓄積に裏打ちされた「太平洋協会ならでは」の事業を展開している。

格化したと言われています。でもその前の78年、当時の大平正芳首相が、「環太平洋連帯構想」を打ち出しています。ところが、この構想は経済連携が目的だったので、経済実態がないとみなされていた太平洋の島々は念頭にはありませんでした。

国際連帯組織の提唱という手柄を取られてしまいました。一方、こんな話もあります。79年、大平内閣がマリアナ海溝に低レベル核廃棄物を試験投棄すると発表した時、太平洋の島々から猛反対の声が上がりました。まだ独立していないミクロネシアの島々からも抗議の声が届いたので。これには日本政府も驚きました。太平洋の海の中に、こんなに多くの政治アクターがあったとは、認識していなかったからです。そこで、この計画はしばらく棚上げされることになりました。

※『ツシタラの死』：出版時に『光と風と夢』に変更

り、被害者でもある。とても辛い経験をしてきたはずですから当時のことは、戦友会や仲間内だけの話として、外部にはマウスシャットした。つまり日本人は、過去の忌まわしい体験につながる島々の記憶を、意識的に忘れ去ろうとしたのでしょうか。21世紀に入ると、戦争体験者も高齢化して、昔を語り継ぐ世代が徐々にいなくなってしまう。かつて島々が日本人に馴染み深かった一例を挙げると、『山月記』を書いた中島敦という小説家をご存じだと思います。彼は1941年に1年弱のパラオ滞任経験があり、『ツシタラの死』という小説を書いています。『ツシタラ』

とは、サモアの語り部のことです。サモア研究者なら誰でも知っているはずですが、普通の日本人は知りませんよね。ですが、そんな言葉が日本の小説の題材になるくらい、当時の日本人には馴染みがあったのです。戦後生まれの私自身も、それまでの島々と日本の関係の深さは、何も知りませんでしたので、島々を訪問し始めた初期の頃、ニューカレドニアのヌーメアの郊外に大きな日本人の墓碑が建っていたことや、フィジーやサモアにも日本人移民の痕跡があるのを知って驚きました。日本人の意識が南洋に向けられるきっかけになったのは、64年の渡航自由化です。海外

旅行が自由になって、ハワイブームが起こったのです。そこから、今日につながる太平洋の島々への回帰が、徐々に広がってきたといえるでしょう。それでも私にしてみれば、まだまだ島々は知られていないと思いますけれど（笑）。

中野 渡航自由化の後、島サミットが開催されるなど、日本の太平洋諸国への認識も変化していったと思いますが、外交的にはどのように対応が変わっていったのでしょうか。

小林 そうです。「環太平洋」と言いながら、英訳では「Pacific Basin」としていましたが、「環太平洋だから、中抜きはドーナツ構想じゃないか。太平洋の連帯だと言って、島々が認識されていない」と批判しましたが、まだ若僧だった私は、相手にされませんでした。ですが、80年に大平首相が亡くなると、構想自体が消えてしまった。その後89年に、オーストラリアの主導でAPEC（アジア太平洋経済協力）が発足しましたが、そのベースとなったのは環太平洋連帯構想なんです。日本は、

## 中曽根内閣と太平洋外交の本格化



上/1980年、ミクロネシアにおける青年育成と農業開発の現況調査のため、オイスカから3名を派遣。写真右端はミノル・ウエキ氏  
下/ミクロネシア三大統領が中曽根総理を訪問した際の様子(アジア太平洋国会議員連盟(APPU)『三大統領訪日アルバム』より)

## 東京から太平洋へ

だと思いません。そのせいか、この会談で「皆さんの同意のない形で、核廃棄物を海洋投棄しません。やる場合は、必ず皆さんの同意を得てからにします」と約束したのです。そして翌85年、政府は正式に海洋投棄の中止を宣言しました。さらに同年、日本の首相としては初めてオセアニア島嶼国であるフィジー、パプアニューギニアを訪問。87年には、倉成正外相がフィジーを訪れ、日本の対島嶼国に関する基本方針について演説しました。これが評判になり、この時の演説骨子が後に「倉成ドクトリン」と呼ばれ、今日につながる対島嶼国外交の基本となりました。そのため、日本の太平洋外交の本格化は、中曽根内閣から始まったと言われているのです。

**中野** オイスカもそれまでアジアを中心に活動していましたが、太平洋へも目を向け、フィジーやパプアニューギニア、パラオに拠点を築いて取り組みを進めていきました。

76年からは「アジア地域開発青年フォーラム」を実施し、名称はアジア地域としていましたが、タイで開催した第一回のフォーラムにはパプアニューギニアからの参加者もいました。そこで第3回の開催時からは「アジア太平洋地域開発青年フォーラム」と改称し、80年代にはフィジー、パラオも開催地となりました。

中でも最初に関わりを持ったのはパラオです。当時ベラウ国立病院の院長だったミノル・ウエキ氏(後に駐日大使)からオイスカに青年育成の要請があり、80年の視察団派遣を皮切りに、現地での活動が始まりました。その頃パラオは、アメリカの信託統治からの独立を目指していて、特に日本の統治下にあった当時を知る人たちからの日本に対する期待の高さを感じました。その後、支局ができ、センターを建設して農村青年への農業研修を行っていました。

ところで、ここまで日本と太平洋島嶼国との歴史的なつ

をされていた方に、「太平洋島嶼国をAPUに引き入れるために、力を貸して欲しい」と言われ、私も一生懸命に尽力しました。太平洋諸国を加えてAPUになってからは、私もさまざまな仕事に関わるようになりました。そして、ミクロネシアには、アメリカの信託統治下にありながら、近々の独立を目指して自治政府ができました。その内の一つ、ミクロネシア連邦の大統領から、日本の首相に会いたいので労をとって欲しいと頼まれたのです。しかし、まだ正式な独立国家ではないので、

外務省経由では首相との会談はセットできない。私に直接の依頼はなかったけれど、マールシャルやパラオの大統領も日本の首相に会いたがっていることを知っていたので、APUの事務局長と一計を案じて、APUのメンバーで衆議院副議長を経験された秋田大助議員を訪ねました。そこで「ミクロネシアから3人の大統領が一緒に来日するようになりますので、中曽根康弘首相に会ってもらえるように尽力して欲しい」とお願いした。すると、秋田先生は「それはいい考えだね。ならば、

APUが3大統領を招待しましょう」と言ってくれ、84年の首相と3大統領の会談が実現したのです。

これまで話した通り、当時の日本外交当局は、太平洋諸国を視野に入れていなかった。中曽根首相もそうだったと思います。ところが、中曽根さんは海軍経理学校で南洋を回った経験がある上に、来日したミクロネシア連邦のナカヤマ、マーシャル諸島のカプアーク氏は日系ではないけど、名前がハルオだったので、こ

とさら親しみを感じられたの

とさら親しみを感じられたの

ながりについてお話ししていただきましたが、ご自身が太平洋に関心を持たれたきっかけは何だったのでしょうか？

**小林** 最初から太平洋島嶼国に関心があったわけではないんです（笑）。私は東京出身ですが、中学生の時に朝日新聞の連載ルポ「ニューギニア高地人」を読んで、この未開社会に憧れを持ちました。渡航自由化前の話ですから、島々の資料も何もない時代です。

その後、ルポの筆者が農学部出身という、ただそれだけの理由で東京農業大学に入りました。とにかく外国、未開地に行きたいという気持ちでした。大学時代には渡航自由化になっていたので、一年生の夏に台湾の高砂族を訪れ、以後も毎年、東南アジアの田舎を巡りました。その頃日本は、エコノミックアニマルなどと揶揄されていた時代。大学卒業後は、シンガポールの南洋大学に留学しましたが、その間に田中角栄首相が日中国交正常化を図り、今まで静かだった大学も、一気に日本商社らが派遣する企業留学生で溢れかえりました。中国語を学ぶためです。そうした留学生

時代に私は、「国際交流とか経済協力を進めないと、日本は大変なことになる」と思い込み、当時アジア会館※の会長で、日本の経済協力の元老であった岩田喜雄さんを訪ね、押しかけ書生になりました。留学中には、現地に進出していた日本の大手商社数社から、中国語要員の即戦力としてスカウトもあつたので、岩田先生からは「簡単には採用されないような大会社ばかりから声をかけてもらったんだから、就職した方が良いよ。その方が親も喜ぶぞ。そもそも今時、書生じゃないだろ」と断られました。でもそこをなんとかとお願ひして、岩田先生の下で国際協力を学び始めました。そんな折、岩田先生からは、日本ミクロネシア協会の立ち上げを準備していたのです。それについては若干の経緯がありますが、組織をスタートさせるに当たり、「君が新協会の事務局長になり、実践しながら国際協力を勉強しなさい」と言われました。島々との関わりは、ここから始まります。

ですから私の経歴は、めちゃくちゃです。島々と子どもとの交流事業を手がけたと思えば、ミクロネシア諸国の開発事業にも関わってきました。今は大学教授として国際政治の講座を持っていますが、博士号は「農業経済学」です。経歴を並べて見ると、支離滅裂ですね。ですが私の中では、リセットしてやり直したことは一度もないんです。いろいろ活動する中で、今一番やりたいこと、やるべきこと、やったら面白そうだと思うことをしてきて、今に至るのです。

※アジア会館：コロンボプランにより、アジア各国から来日する研修生の受け入れ態勢を整備し、相互理解を深める友好親善の場として、社団法人アジア協会が中心となつて57年に設立した研修宿泊施設。

**中野** そうしてさまざまな取り組みをされる中で、島サミットがスタートしたのですね。

**小林** その通りです。島サミット開催のきっかけは、国連総会で安全保障理事会の非常任理事国のアジア枠をインドと争った96年に遡ります。その時、日本は何も働きかけをしていないのに、SPF（現在のPIF・太平洋諸島フォーラム）の年次総会で、日本支持の決議が採択されました。政府はこれに感激し、この気持ちに報いたいということから、島嶼国首脳を日本に招く

アイデアが生まれたのです。そして97年、第1回の首脳会議が橋本龍太郎内閣の時に東京で開催されましたが、首相は行政改革国会に張り付けになり、会合には出席できなかった。外務大臣も欠席。当時の高村政務次官が議長を務めました。来日首脳たちは、旧宗主国でもない日本がこうした会議を開催したことを評価し、3年ごとに首脳会議を日本で実施する合意ができました。しかし一方で、「各国の首脳を呼んでおきながら、日本の首相がいらないのはどうい



2010年、ソロモン諸島の漁村で日本のODAの実施効果について聞き取り調査をしている様子。現地との交流を密にしながら、太平洋諸国の開発・発展のための事業に尽力した

わけだ」との不満も大きかったのです。私は、不評だった会議をどう改善すべきか外務省から問われ、まず首相のスケジュールを確保し、地方で開催すべきと提言しました。東京では重要事項が目白押しでも、地方ではほかのニュースに埋没することはないし、何より地方に出れば首相のスケジュールを容易に変更できないから、出席を確保しやすい。ほかにも多くのメリットを挙げましたが、警護や経費、人員の問題などで、私の提案は一笑に付されました。

しかし、第2回では宮崎での地方開催が実現しました。これは、小淵恵三首相が2000年7月の主要国首脳会議（先進国サミット）を「九州・沖縄サミット」と名付け、沖縄での開催を決めたことにあります。いずれの先進国も、国際的重要会議をその国の方で開催するのが普通でしたが、日本だけは、東京以外で開催したことがなく、これが初めてのことでした。それで、直前の5月に開催予定だった第2回島サミットも、自動的に宮崎開催になったわけです。以後、重要国際会議が地方で

開催されるのが当たり前になりました。しかし、小淵首相は急死されたので、第2回サミットは後継の森喜朗首相が仕切りました。森首相は、期間中ずっと各国首脳との交流を深め、会議は大成りに終わりました。昨年7月には、10回目のサミットが東京で開催されましたが、現在の島サミットの会議形式は、この第2回で確立されたのです。

**中野** 小林さんが各国の首脳レベルとお付き合いの中で、日本のプレゼンスを高めてきてくださったことに敬意を表します。それだけではなく、子どもたちとの交流もされてきていますよね。

私は、上皇様、上皇后様が05年にサイパン、15年にパラオやミクロネシアをご訪問された際、慰霊碑の前で海に向かって深々と頭を下げ、拝礼されていました。特にペリリュー島では、そこにたどり着くまでゆっくり徐行するお車に、現地でお迎えした人々は心打たれたそうです。両陛下は斃

れた英霊お一人おひとりに心を通わされているように感じられ、本当にありがたかったです。私にも忘れられない慰霊の旅でした。最近、そのご訪問は、小林さんのなさってきたミクロネシアの子どもたちとの交流から発展したというのを知って、私が言うのもおかしいのですが、お礼を言いたい気持ちになりました。

**小林** 私が行ったのは、日本と太平洋諸国の子どもたちを

## 子どもの交流から慰霊の旅へ



上／1981年、トラック・トール島で子どもたちと交流している様子。右から4人目が小林氏

下／1979年、東宮御所檜の間で、皇太子殿下（現上皇陛下）ご一家がミクロネシア連邦ポンペイ州から来日した子どもたちと面会された際の様子（太平洋協会提供）

同時相互交流させるという事業です。第1回は76年、日本とパラオの相互交流でした。事業終了後にパラオを訪問すると、もちろん相互交流は大好評でしたが、帰国した子どもたちが叱られてしまったと話を耳にしました。そこでよく聞いてみたら、子どもたちのおじいちゃん、おばあちゃんに「せっかく東京に行ったのに、天皇陛下様にご挨拶しないで帰ってきたのか」と怒られたと言っています。私は、未来に向けた子どもたちの交流だから、戦争や占領など過去の遺産に関わることはなるべく避けるべきと考えていました。ですから、東京見学に巡る場所から、意識して皇居を外していたのです。しかし、年配者がそう言うなら考え直さなければいけないかな、とも思いました。とはいえ、外から皇居や二重橋を見学しても面白くない。せっかくなら、天皇陛下は無理でも皇太子殿下にお会いいただけたらと考えました。それも無理な希望

でしたが、いろいろなご縁で、皇太子殿下（現上皇陛下）に会っていただけることになったのです。その時、ポンペイから来た子どもたちはTシャツ、ゴム草履姿。招かれた東宮御所の檜の間で、殿下は「私は小さい頃、小学校の教科書で、トラック島だよりを読んでいた。ヤシの実やバナナのイラストが描かれていたのを見て南の島に憧れていたの、そのような島から皆さんが来ると聞いて、とても楽しみにしていました」とスピーチしてください、以降もタイトなスケジュールの中で、3回も会っていただくことができたのです。

その後、殿下はミクロネシア連邦のナカヤマ大統領にもお会いくださいましたが、それもこの交流事業がきっかけなのです。APPUで3人の大統領を中曽根総理に会わせてくれた秋田先生は、ミクロネシアから3人を選挙区にある四国女子大学に留学生として招いていましたが、その一人がローズマリー・ナカヤマさん。私は、彼女らを来日した子ども世話役としてグループに入れていたので、一緒に皇太子殿下とお会いしたのです。その際に殿下は、ナカヤマという名札に目を留められて、彼女のお父さんが大統領であること知り、「ぜひお会いしたいですね」とおっしゃった。それがきっかけで、独立前の大統領だけれど、プライベートの友人として、午後のお茶にお招きいただいたというわけです。

また、現在のジョン・フリッツ駐日大使も、皇室とは縁ができました。彼はトラック島の日系酋長の甥です。大使は年始めに天皇陛下とお会いする機会があるのですが、フリッツ大使は日系人で、日本語も長いので、陛下も彼の名前と顔を覚えていて、いつもお言葉をかけてくださるそうです。そうしたフリッツ大使から聞いた話や、拝聴した陛下のお言葉から、陛下は元日本領ミクロネシアには特別な思いがあって、いずれは訪問したいと思っていられましたのではないかと感じておりました。

**中野** 遺族の方にとっても良かったと思います。オイスカの支援者の中には、遺族会のメンバーも多く、活動地を訪れて慰霊碑に手を合わせる機会もあります。私も17年には、パプアニューギニアのラバウルにあるオイスカの研修センターの30周年記念行事に合わせ、全国の会員の皆さんと現地を訪問し、慰霊碑を参拝してまいりました。戦争を体験していない世代の私たちですが、そうした歴史にも目を向けながら活動していかなければならないと思っています。

現在、太平洋地域では、先ほどのラバウル研修センターと、フィジーの青年スポーツ省が運営する国立青年研修センターで農業を中心とした青年育成を行っており、日本に来て学んでいる研修生も、皆熱心に取り組んでいます。

**小林** 私自身は、オイスカの活動を評価していますが、パラオは撤退したんですよね。残念である一方、その理由も理解できます。ある時、知り合いがパラオから青年交流で日本に来た青年を牛井屋に連れて行ったそうです。すると、日本人が働いている様子を見

# 太平洋諸国で活動するジレンマ

## オイスカの

太平洋諸国からの訪日研修生数  
1963～2024年度（延べ人数）

	男性	女性	人数
サモア	1	0	1
ソロモン諸島	0	3	3
トンガ	7	2	9
バヌアツ	0	2	2
パプアニューギニア	136	27	163
パラオ	19	4	23
フィジー	116	27	143
マーシャル諸島	3	0	3
ミクロネシア連邦	37	3	40
計	319	68	387

て、「なんで日本人がこんなつまらない仕事をしているの？こんな仕事は、パラオでは出稼ぎ外国人がやるんだよ」と言ったそうです。アメリカをはじめ、海外から多額の経済援助が入ってくる現状では、地道に農業をしたり、サービスマンに従事しようとする意識が薄いのでしよう。自分の国で産業を興して仕事をつくり出そうという考えには至らず、例えば研修で高度なスキルを身につけたら、外国に移住しようと考ええる。この方が、お金を稼ぐには手っ取り早いですからね。

**中野** オイスカがパラオに入ったのは、将来的に海外からの援助がなくなつたときに、自立していかなければならないと心配していたウエキさんから要請を受けたからなんです。

**小林** ウエキさんはいつも嘆いていましたよね。だから、オイスカが基盤とする、実務をベースにした農業の技術協力なり、交流なりというものが重要なんだと思います。でも、それを現実にとり込んでやっていくのは簡単じゃないんですよね。

**中野** 現地の人々と一緒に生活し、共に汗を流しながら少しずつ信頼関係を築いて初め

# 地道に、長く続けていくこと

て、国の発展を担う青年を育てていくことができる。そして育った人材が、ふるさとのリーダー、先達となって、さらに若い人々を育てていく。

これまで、太平洋の島からきた訪日研修生は380人を越えますが、これからも地道に活動を続けることで、「自分の国は自分たちで豊かにするんだ」という人々の輪が広がってほしいと思います。

太平洋の小さな島国は、日本と同様に自然災害の脅威にもさらされていますよね。オイスカはフィジーで93年からマングローブ植林を進めています。近年はマングローブ林の内陸側に海岸林を育てて、二重の防御で海からの風や高潮から地域を守る取り組みも進めています。また、研修センターでは今年度、Eco-DRRコースが新設されました。自然災害から人々を守るための手法や枠組みを学ぶ若者の育成が急務となっているということだと思えます。こうした青年育成に注力しつつ、現地スタッフや研修生OB・OGが、さらにそこに暮らす住民たちと一緒に、地域の環境課題にも取り組んで

います。

**小林** 現地の人々と一緒に取り組むことは、環境に対する意識啓発にもつながります。ただ植えるとか、護岸工事を

するのでなく、なぜそのような活動をするのか、今自分たちの住む地域の環境がどうなっているのかを知ってもらうことも重要だと思います。

東京大学理学部の茅根創先生が、JICAのプロジェクトで、海面上昇が問題になっているツバルの護岸整備事業に取り組まれました。茅根先生は、何年も現地でフィールドワークを続け、ツバルの海面上昇が単に温暖化によるものではなく、島の開発による環境破壊が原因であることを明らかにして、海流の流れを変えないスロープ状の護岸整備を4年間かけて進めました。こうすることで、そのスロープにさまざまな有孔虫や魚介類が棲み着いて、自然の形で島が守られると。しかし、これは目に見えて効果が分かるものではないんですね。

だから現地でも理解されず、喜ばれなかった。

**中野** 長い目で見ると、こんなに有効なことはないと思えますけどね。

**小林** そうなんです。地道なのは評価されにくい。中途半端な知識では、理解されない

ので、やはりオイスカみたいにしていかないといけないですね。それに、近年は広くSDGsも注目されていますが、オイスカはそのずっと前からやってきている活動です。民間団体で長くそのような活動を続けているというのは、すごく立派なことですよ。私も細々と自分の領域で活動しているの、それがいかに大変なのか分かりません。だけど、残念ながら、地味で地道な活動は評価されにくい。でも、それを承知でやらないといけない。そこに価値があるのだと思います。

**中野** 昨年10月に「子供の森」計画を担当するスタッフ向けの訪日研修がありました。彼らの報告を聞くと、本当に地道な中で苦労しながらやっている。でもスタッフも子どもたちも、生き生きと楽しんで取り組んでいるんです。パプアニューギニアやフィジーでも「子供の森」計画に積極的に取り組んでいて、学校や山、沿岸で木を植えたり、有機農業をしたり、本当に楽しんでやっているのが伝わってきます。これも、現地のスタッフが地域や子どもたちに

寄り添いながら、少しずつ少しずつ活動の根を広げてくれたからだと思えます。

**小林** 自分の手で植えたり、収穫したりするのは究極的な喜びですね。そういう活動をずっと続けていってほしい。

**中野** 長い歴史の中で、各国での活動は状況的にうまくいかなかったこともたくさんあり、国際協力は難しいと今でも感じています。でも昨年には、フィジーの訪日研修生OBであるシテイベニ（22年度西日本研修センター）が、帰国後にフィジー農業省から



表彰式で賞状を手にするシテイベニ(中央)と父(左)



ヤングファーマー賞を受賞したとの嬉しい報告も届くなど、地道な取り組みの先に、未来に活動をつなげてくれる人がいるという希望も感じます。

前向きに取り組むスタッフや、活動を応援してくれる研修了生たち、支えてくださる皆さんと共に、頑張ってくださいと思います。

**小林** オイスカ応援団の方も、そういう取り組みや人に触れて、感激して一生懸命関わってくれているじゃないですか。オイスカの活動や志を知って、よく理解しているから、活動を支援してくれるわけですよ。知ってもらおうということ

は難しいですが、ネット環境を使って新たな掘り起こしもしていききたいですね。

**中野** この数年は、ウェブを活用して積極的に発信するようになってきました。やっぱり若い人の感覚でないと、若い人は呼べないですね。

**小林** そう。本当なら年寄り

は自然にフェードアウトしていかないといけないけど、次が育ってないとせっかく続け

てきた取り組みが消滅するってことになっちゃうから。

**中野** これまで支えてきてくださった人たちに對しての責任がありますからね。

オイスカの

太平洋諸国での主な取り組み

- 1979年 太平洋地域初のオイスカ訪日研修生(バブアニューギニア、フィジー)が来日
- 1980年 オイスカ・パラオ発足
- 1982年 パラオ研修センター設立
- 1986年 パラオで第11回アジア太平洋青年フォーラムを開催
- 1987年 バブアニューギニアで、オイスカ・ラバウル発足  
ラバウル研修センター設立
- 1990年 フィジーの国立青年研修センターの農業研修部門をオイスカが受け持ち、活動がスタート
- 1992年 フィジーで「子供の森」計画開始
- 1993年 フィジーでマングローブ植林プロジェクト開始
- 1994年 バブアニューギニアで「子供の森」計画開始
- 2002年 バブアニューギニアで定置型有機循環農業普及プロジェクト開始



1986年にはパラオで青年フォーラムが開催された。写真は開催の挨拶をするオイスカ・パラオ総局初代会長のミノル・ウエキ氏